

「秀才らしくない秀才」

石野信一

たしか、昭和三十八年秋だったと思うが、大蔵省の某君の結婚披露宴の時のことである。媒酌人は当時自民党幹事長の前尾さん夫妻、新郎側の主賓のテールには池田総理大臣夫妻、大平外務大臣夫妻、それに私が当時大蔵事務次官だったので新郎の上司として私ども夫妻が坐っていた。来賓も多く盛大な披露宴であった。

まず媒酌人の挨拶が始まったが、前尾さんが新郎の学歴を説明して、「新郎は大変な秀才である」と紹介した。大蔵官僚が新郎である場合、そういう紹介は珍しいことではないのだが、つづいて主賓の池田さんの祝辞、立ち上がるや開口一番、「媒酌人の話だと新郎は秀才だそうだが、わしは秀才は好かん」と、いかにも池田さんらしい荒削りの発言が飛び出した。結局は、人間味が大切だということ、教育勅語の話で終わったが、そのあと私が指名された。そこで私は咄嗟に、「大蔵省の人事を歴史的にたどってみると、何年かことに一人ずつ、本当は秀才なだけどもどうみても秀才とは思えないようなのがいる。そういうのが案外、総理大臣になったり幹事長になったり、外務大臣になったりしている」といったら満場大笑いになった。「新郎はたしかに秀才なのだが、村夫子然としていて人間味もあり、同僚からも愛されている」と紹介して私は祝辞を終えたのだが、あとで考えて、私が「秀才らしくない秀才」といったのは池田さん、前尾さんにもそれぞれあてはまるが、大平君にもピッタリだと思った。

大平君が大蔵省に入ってきたのは、私よりも一年あとで、昭和十一年であった。当時、大蔵省に入った者は二、

三年間、判任学士と呼ばれて、税務署長や海外勤務になって本省を離れるまで各局に配属され、主として調査のような責任のない仕事をあてがわれ、むしろ将来幹部になるのに備えて旧制の高等学校生活に似た、人間形成に役立つような、半分勉強半分遊びといった過ごし方をしていた。二、三十人の判任学士が一緒に、早く結婚した者の家で廻り持ちで読書会を開いて、ケインズの貨幣論やハーバラーの好況不況の原理といった経済関係の書籍や、当時の時代を反映する全体主義原理を説いたものなどを交代で読んできて報告し合ったり、温泉地に旅行をして徹夜で麻雀をしたり、下手なスキーを楽しんだりしていた。

その頃綽名をつけ合って、大平君は熊だなぞといわれていたが、当時から大人の考え方をする方だったので、いつの間にか後輩の元気のいい連中のボスになっていった。大蔵省時代、仕事ぶりはシャープな感じは与えなかったが、つねに自分自身の考えを持って事に当たっていた。

政治家になってからのことだが、賀屋興宣さんを囲んで、通産省と大蔵省の卒業生十人ばかりが集まる会があったが、賀屋さんが亡くなってからは、これが大平会となり、大平君は総理になってからも毎月必ず出席して、ざくばらんに政治、経済、社会のこと、自分の読んだ本のことなど気楽に話し合っていた。その会で、ある時、会場の管理人が字を書いてほしいと頼み、色紙を二十枚ほど持ってきた。総理は快く筆をとり書き始めたが、一枚一枚文句を変えて、同じ文句のを書かない。もう同じ文句が出てくるかと思うが、次から次へと別の文句に変える。「随分たくさん文句を知ってるなあ」といったら、「百くらいは知ってるよ」といって書き続けた。

笑い顔がかわいいといわれたが、たしかに人間的な魅力を持ち、よく本を読み、よく物ごとを考える人柄であった。そして真面目さを持ち続けた人であった。哲学をもった一人の政治家を失ったことは誠に残念であるが、今はただご冥福を祈るばかりである。

(太陽神戸銀行会長)